

## はじめに

2013年7月、生活困窮者支援を担う人材のあり方について、厚生労働省内で本格的な検討が始まりました。このときの検討会で奥田知志氏と議論をしたのが、伴走型支援との最初の出会いです。当時、奥田氏はご自身のホームレス支援を踏まえて、制度外福祉と制度内福祉の違いから、制度内福祉の支援は、本当の支援になっているのかと厳しく追及されていました。それは単に制度化されているか否かの違いではなく、それぞれの支援の哲学の違いでした。

ただ当時の私は、そのことがよくわからずにいたのも事実です。「断らない支援」といわれても、支援者は「イエスマン」になっていいのか。「伴走する支援」といわれても、寄り添うだけでは問題の先送り、何も解決しないのではないか。「助けてと言えぬ社会」といわれても、そもそも「助けてと言えない人」はどうするのか。人生の最後まで「つながり続けること」といわれても、それは牧師である奥田氏にしかできないのではないか。

そんな素朴な疑問を奥田氏に投げかけると、彼はいつもその本質を深い言葉で答えてくれました。その深さは、奥田氏自身が悩みながら、葛藤しながら、紡ぎ出してきた言葉です。こうした奥田氏とのやり取りを通して、「伴走型支援」の原論的なものが見えてきました。

次に浮かんだ疑問は、こうした考え方は、ホームレス支援をしてきた「業界」だけのものなのか、生活のしづらさを抱えた人たちを支援している人たちに共通するものなのか、ということでした。その後も、生活困窮者支援に関わるさまざまな人たちと話をする機会に恵まれました。その中で、それぞれ表現は違えども「伴走する」という価値を大切にしていることがわかりました。それは同時に、優れた支援者に共通しているのは課題解決型の支援の「限界」を、自ら体験しているということでした。そこに共通するのは、社会的に孤立した状態にある人たちへの支援と排除する地域への働きかけです。それは制度によるサービスを当てはめるだけでは解決しません。その人自身の存在を丸ごと受け入れながら、一度、断ち切れた社会や人への信頼を紡ぎなおす過程です。同時にそれは本人や家族だけの支援ではなく、彼らを孤立させた地域を変えてい

くことをめざしていました。問題は簡単には解決しないのです。奥田氏と同様に、本書の執筆者は、こうした実践の中から紡ぎ出されたメッセージを丁寧に綴ってくれました。

今回、この本を編纂したいと思ったのは、「伴走型支援」という言葉だけが独り歩きし、矮小化されてはいけないと思ったことが1つあります。「地域共生社会に向けた包括的支援と多様な参加・協働の推進に関する検討会」(地域共生社会推進検討会)の最終とりまとめ(2019年)において、「伴走型支援」が取り上げられました。また昨今では、政府としても深刻化する社会的な孤独・孤立の対策が進められようとしています。こうした背景の中で、「伴走型支援」という本質や意義を問い、社会への問題提起として発信する必要があると思ったからです。

本書では「伴走型支援」の全体像を描くために、第Ⅰ部では、基本的な概念とこのことが求められてきた社会的背景について論じました。第Ⅱ部では、現場の実践家により展開されている「伴走型支援」の現実や課題、必要性について提起しました。第Ⅲ部では、「伴走型支援」の有する価値や可能性、これからの支援のあり方、社会のあり方にまで広げて論及しました。

「伴走型支援」が万能だということではありません。しかし支援者や社会が「伴走型支援」を意識すること、試みていくことで、支援の関係性、社会の構造を変えていくことができるかもしれません。

「伴走型支援」については、学術的にも定まった概念や方法論が確立されてはいません。新しい支援論の1つとして、理念や方法、仕組みを構築していく過程にあります。本書でもあえて用い方を統一していません。共通する視点を確認しながら、むしろ執筆者によって違う力点を感じてほしいと思います。それは支援者の援助観や哲学、そして実践を通して形づくられてきたものです。そこで本書では、各章の扉で各自のプロフィールをお伝えすることにしました。

出版事情が厳しい中、本書の意義をご理解いただき、こうして出版できたのは有斐閣のおかげです。記して感謝を申し上げます。

2021年7月

編者を代表して 原田 正樹

## 執筆者紹介 (執筆順, \*は編者)

- \*奥田 知志 (おくだ ともし) 第1章, 終章  
NPO 法人抱樸理事長, 東八幡キリスト教会牧師
- 稲月 正 (いなづき ただし) 第2章  
北九州市立大学基盤教育センター／地域創生学群教授
- 藤森 克彦 (ふじもり かつひこ) 第3章  
日本福祉大学福祉経営学部教授
- 勝部 麗子 (かつべ れいこ) 第4章  
社会福祉法人豊中市社会福祉協議会福祉推進室長
- 谷口 仁史 (たにぐち ひとし) 第5章  
認定NPO法人スチューデント・サポート・フェイス代表理事
- 大原 裕介 (おおはら ゆうすけ) 第6章  
社会福祉法人ゆうゆう理事長
- \*原田 正樹 (はらだ まさき) 第7章  
日本福祉大学社会福祉学部教授
- 向谷地 生良 (むかいやち いくよし) 第8章  
北海道医療大学大学院看護福祉研究科特任教授／浦河べてるの家理事
- 野澤 和弘 (のざわ かずひろ) 第9章  
植草学園大学副学長／一般社団法人スローコミュニケーション代表
- 村木 厚子 (むらき あつこ) 第10章  
津田塾大学客員教授

# 目 次

## 第 I 部 伴走型支援を考える

第 1 章	伴走型支援の理念と価値	奥田 知志	3
1	伴走への気づき		4
2	経済的困窮と社会的孤立 —ハウスとホームは違う		6
3	伴走型支援とは何か —つながることの創造性		9
	「つながり続ける」こと	なぜ、社会的孤立が問題か	伴走型支援の価値観
	つながりの本質	機能としての2つの支援	
	本人主体	専門職の役割	家族機能の社会化
	人生という時間軸		
	伴走型支援のイメージ図		17
第 2 章	なぜ伴走型支援が求められているのか	稲月 正	19
	はじめに		
1	生活困窮とは		20
	経済的困窮, 社会的孤立, 心身の健康や意欲の喪失	基準は「普通の生活」を送ることができるかどうか	生活困窮状態は社会的排除によって生じる
2	生活困窮の広がりとうなり		22
	生活困窮の広がり	経済的困窮と社会的孤立の重なり	制度の隙間
3	社会的な支援の必要性		28
	活力ある社会の維持のためにも社会的な支援は必要	社会的な支援の2つの柱—社会保障制度の拡充と地域での「つなぎ・つながり」	伴走型支援の可能性
			おわりに
第 3 章	単身化する社会と社会的孤立に対する伴走型支援	藤森 克彦	35
	はじめに		
1	単身世帯の増加の実態とその要因		36
	単身世帯の定義	単身世帯の増加の実態とその要因	今後の単身世帯の増加
		未婚の単身高齢者の増加	

2	単身者の社会的孤立の実態	41
3	社会的孤立は問題なのか	43
	日常的なサポートの欠如　　生きる意欲や自己肯定感の低下	
	経済的困窮との関連	
4	社会的孤立に対する伴走型支援の意義	46
	伴走型支援の特徴　　社会的孤立に対する伴走型支援の意義	
5	おわりに	51

## 第Ⅱ部 人と地域に伴走する支援

### 第4章 伴走型支援と地域づくり ————— 勝部 麗子 55

#### ——住民とともにつくる伴走型支援

1	コミュニティソーシャルワーカー事業で見えてきた 社会的孤立	56
	はじめに　　人間関係の貧困＝社会的孤立	
2	そもそもSOSを出せない人たちとどうつながるのか	57
3	地域住民とともにつくる伴走型支援	58
	——個を支えることと地域づくりを一体的に	
	アルコール依存　　ゴミ屋敷　　8050問題　　ひきこもり支 援——スカウトするアウトリーチ　　ホームレス支援	
4	専門職としての伴走型支援と地域づくりの役割	65
	1人も取りこぼさないという視点　　排除ではなく包摂の視点	
	アウトリーチ　　「困った人」は困った問題を抱えている　　本 人を支える人を増やす　　伴走型支援を通じて仕組みづくりを行 う　　つなぐだけでは変わらない　　いつでも相談できる人がい る　　支えられていた人は支える人に	
5	おわりに——伴走型支援を通じた地域づくりとは	68

### 第5章 アウトリーチと伴走型支援 ————— 谷口 仁史 71

1	深刻化する社会的孤立と伴走型支援における アウトリーチの必要性	72
	子ども・若者領域においても裾野が広がり続ける「社会的孤立」	
	アウトリーチ（訪問支援）を基軸としたNPO法人設立の経緯	
	「声なきSOS」を受け止める「伴走型支援」における「アウトリ	

ーチ」の必要性

- 2 「伴走型支援」を前提としたアウトリーチのあり方 …………… 75  
アウトリーチの成否の鍵を握る「事前準備」 アウトリーチにおける事前準備「3段階のプロセス」 関係性の変化に着眼した支援段階の移行
- 3 社会参加まで責任をもって見届ける伴走型支援の実際 …………… 80  
「ストレス耐性」に着眼した支援過程の段階的な移行 不遇な経験によって生じる不合理な「思考（認知）」の修正 「環境」への働きかけを含む多面的援助アプローチ
- 4 佐賀県におけるNPOの「協働型」「創造型」支援実践の「現在地」…………… 87  
多様な「つながり」の中での支援実践によって育まれた社会的信頼 アウトリーチを基軸にワンストップ化を推進している佐賀県の取組み 深刻化・複合化した課題を抱える子ども・若者の孤立の実態 「ひきこもり」問題から見えた「従来型」の公的支援の限界 従来型の公的支援の限界を突破するための組織内での対策 「どんな境遇の子どもも見捨てない！」限界を補うネットワークづくり
- 5 アウトリーチと伴走型支援がもつポテンシャル …………… 92

## 第6章 越境する伴走型支援 ————— 大原 裕介 95

- 1 「私で」ではなく「私たち」でおりなす …………… 96  
ある男の子との出会い 彼との出会いから考える伴走型支援 タスキをどのようにつないでいくか 伴走する人を伴走する
- 2 対話と共感 …………… 100  
その人を知るために対話をする 多様なアプローチから対話が生まれる
- 3 福祉を福祉で完結しない …………… 101  
夕張で始めた配食サービス 本格的なもので勝負する——他領域の人が福祉やケアの魅力に気づく できないことではなくできることに目を向ける
- 4 「1人の想い」を文化にする …………… 105  
「1人のニーズからしか生まれない」 1人を大切にするために 1日を大切にす 制度を道具として使う 寄り添い、身近にある福祉 次世代にタスキをつないでいく

<b>第7章</b>	<b>日本における伴走型支援の展開</b> —————	<b>原田 正樹</b>	<b>111</b>
1	伴走型支援の生成		112
	日本における伴走型支援の原形	社会的孤立に向けたアプローチ	
2	伴走型支援とソーシャルワーク		117
	伴走型支援とジェネラリスト・ソーシャルワーク	伴走型支援のめざす相互実現的自立	
3	伴走型支援の展開		122
	伴走型支援の関係構造のフェーズ	伴走型支援を定着させていくために	
		伴走型支援がつくる社会のカタチ	

### 第Ⅲ部 新しい社会を構想する

<b>第8章</b>	<b>伴走型支援と当事者研究</b> —————	<b>向谷地 生良</b>	<b>131</b>
	はじめに		
1	いつでも、どこでも、いつまでも		133
2	「問題な人」から「経験専門家」へ		136
3	当事者研究の誕生		139
4	当事者研究の理念と展開		141
	当事者研究とは	当事者研究と3つの壁	
	当事者研究とユーモア	当事者研究における「生きづらさ」の理解	
	当事者研究の理念	当事者研究の研究テーマ	
		「自分の研究者」「自分の専門家」になる——研究の進め方	
5	「伴走型支援」と当事者研究		152
<b>第9章</b>	<b>伴走型支援は本当に有効か</b> —————	<b>野澤 和弘</b>	<b>155</b>
1	「自立」の意味を問い直す		156
	ALS 囑託殺人の衝撃	多額の費用がかかる現実	
		社会保障の落とし穴	
2	新しい時代の社会保障		161
	命は誰のものか	ただ一緒にいる (being) ということ	
3	本人中心の福祉を		164
	伴走型が有効であるために	意思決定支援	

## 第10章 伴走型支援がつくる未来 ————— 村木 厚子 171

- 1 伴走型支援の意味するところ …………… 172  
「伴走型支援」からイメージするもの 「プロの支援」とは何か  
自立とは何か
- 2 困難な状況の中で必要なものは何か …………… 175  
必要な2つの支え 支える側に回ることの大切さ
- 3 地域の資源をどうつくるか、どう生かすか …………… 178  
制度はどこまできたか ゼロを1にする努力を続ける 担い  
手を創る 「異なるもの」とのつながりが面白い 社会の仕  
組みそのものを変える まとめにかえて

## 終章 あらためて伴走型支援とは何か ————— 奥田 知志 187 —— 物語の支援

- 1 伴走の成果 —— 物語の創造 …………… 188
- 2 「エサ」と「弁当」 —— 人が物を物語に変える …………… 189
- 3 支援の両輪 —— 断らないために …………… 191
- 4 おわりに —— 「何もできなかった」は、本当か？ …………… 192

## 索引 195

\*本書では執筆者のメッセージを伝えやすくするために、引用文献をつくらず、本文中に参考文献を示す形式にしました。ただし章の内容によってはこの限りではありません。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。



# 1 伴走への気づき

---

私が「伴走型支援」を強く意識し始めたのは、2000年5月の「西鉄バスジャック事件」がきっかけでした。1988年12月から始まった北九州におけるホームレス支援は、そのときすでに12年目に入っていました。訪ね出会うことから始まり、相談、そして自立。多くの人々が新しい人生を切り拓いていかれます。

ですが一方で10年間以上、弁当を渡し声をかけ続けているにもかかわらず、一歩が踏み出せないでいる人がおられました。「すぐには、問題解決できない」という現実には、私たちは「焦り」を感じていました。スタッフからは「これ以上お弁当を渡す意味はあるのか」という声も聞かれるようになり、支援の意味が問われていました。「自立に向かう良いホームレス」と「立ち上がろうとしない悪いホームレス」という分断が支援者の中にさえ生じ始めたそのとき、あの事件が起きたのです。

17歳の男子高校生が長距離バスを乗っ取り1人を殺害、2人に重傷を負わせたこの事件は、社会に大きな衝撃を与えました。彼は中学時代にいじめに遭い、不登校となります。高校に進学するも、通学は難しい。密かに「母校」の襲撃を計画します。実行直前に両親が気づき、国立の精神科病院に入院することになりました。

5月の大型連休に、外泊許可を得て自宅に戻った彼は、バスジャックを決行しました。結果、死亡者1名、負傷者2名を出すことになりました。

母親が入院を手配してくれた大学教授に宛てた手紙が、事件後、新聞に公開されました。手紙を読んだ日の衝撃は今も忘れられません。

いじめが原因で中学3年の夏頃より荒れ始め、まるっきり違う人格のようになり家庭内暴力になって何か違う方向へ行く危険性もあり不安でした。親が気づいても、病院の受診がない、診療したことがないからと断られる。医師、児童相談所、教育センター、教育相談所などいろいろ回りましたが、動いてくださる先生は1人もいらっしゃらない。入院して20日余り、ま

じめでお利口さんを装っているとのこと。何を考えているのか、大きな不安に包まれています。入院当日、覚えていろよ、ただではおかないからなという言葉が忘れられません。心が開かれていない状態で退院となれば、今まで以上に暴力がひどくなるのではと不安です。心の闇がもっと広がるような気がします。このまま自分を閉じ込めた闇の中で一生終わってほしくはありません。しかし、一筋縄ではいかない強さももっていて、繊細で、敏感で、私たちの行動を見抜いて動いているようなところもあります。入院先の先生にお任せするしかありませんが、退院後の不安が強すぎて力がわいてこないのです。

実は、私も不登校の子どもの親でした。ですからこの母親の言葉に、今も胸が痛みます。「今まで以上に暴力がひどくなるのでは」との母親の心配は現実のものとなりました。

手紙の中で私をもっとも注目したのは、「親が気づいても、病院の受診がない、診療したことがないからと断られる。医師、児童相談所、教育センター、教育相談所などいろいろ回りましたが、動いてくださる先生は1人もいらっしゃらない」の部分でした。かつての「いろいろ回っていた」自分を思い出します。一方で、この言葉に違和感も抱きました。

とくに「動いてくださる先生は1人もいらっしゃらない」の部分です。不登校児の親であった私が求めていたものとは違うと感じたからです。私が当時求めていたのは、「動いてくださる先生」ではありませんでした。「治してくださる」あるいは「問題を解決してくださる先生」でした。腕のいいカウンセラーはいないか？ 精神科医は？ 特効薬は？ と、私たち親子は彷徨っていたのでした。それは親である私の正直な気持ちだったと思います。

ですが、この母親は「動いてくださる先生」と書いた。なぜなのか。数年間に及ぶ息子との葛藤の中で母親は気づいていたのだと思います。「一筋縄ではいかない」ことを。だから彼女は、「動いてくださる先生」を求めた。本音は「治してくれる先生」だったと思います。しかし、それは、にわかには見つからない。だったら「とにもかくにも一緒に右往左往してくれる人」「一緒に喜び、一緒に泣き、一緒に悔しがってくれる人」が彼女は必要だと感じていたのです。

「問題解決」をあきらめていたとは思えません。それが容易ではないことを彼女は知っていたのです。だから彼女は「伴走者」を求めたのだと私は考えました。実際にこのお母さんとお会いしたことはありませんから、どんな思いであの手紙を書かれたのかはわかりません。でも「一筋縄ではいかない」不登校の息子とやはり「一筋縄ではいかない」路上の人々と向き合っていた当時の私に、あの言葉は強烈に迫ってきたのです。

「動いてくれる」——それならば私にもできる。実に単純にあの手紙に応えようと思いました。もしあの言葉が「治してくれる先生」や「問題解決してくれる専門家」だったなら、私は「断る理由」をもてたと思います。なぜなら私は「専門家」ではないからです。しかし、「動いてくれる人」と言われたら、もはや断る理由はありません。「一緒にいる」「つながる」、それで支援になるのなら、もはや「断る」ことはできないと考えたのです。さらに「誰でも支援者になれる」という漠とした希望を私は得たと思いました。伴走型支援のイメージが明確になったときでした。

私たちは、常に「断る理由」を考えてきたと思います。自業自得と言い切る「自己責任論」はその最たるものといえます。そこまでの冷たさはなくても「相談を引き受けたら問題を解決しなければならない」というプレッシャーが、足をすくませていたのも事実だと思います。しかし、「一緒にいること」「つながること」が助けとなるのなら、私たちにできることはまだまだある。早々に「問題解決」とならなくても「やれること」はある。母親の手紙は、私にそのことを教えてくれたのです。

## 2 経済的困窮と社会的孤立

—— ハウスとホームは違う

---

NPO 法人抱樸の活動は、炊き出しから始まりました。33年後の現在も続く基本活動です。始めるにあたり私たちは「なぜ炊き出しをするのか」を議論しました。食べることもままならない路上の人々に食料を配る。「いのちを守るため」。答えは単純でした。多く的人是う考えると思います。しかし週に一度、

弁当を配って「いのちを守る」は正直言い過ぎだと思います。もし、その理由なら毎日活動すべきです。

議論の末、1つの結論にたどり着きました。「友だちの家を訪ねるとき、手土産ぐらい持っていこう」。それが炊き出しを行う理由でした。「食の提供」以上に「つながりを創ること」「友だちになること」が重要だと考えたのです。これは子ども食堂も同じだと思います。「いのちを守る」と同時に「ここには信頼できる大人がいる。いざというときにはここにおいで」という「つながり」を提供しているのだと思います。

とはいえ「つながり」だけでは問題解決は難しいのも事実です。それで、活動開始3年目。路上生活者の「困窮」を「家がないこと」と「仕事（お金）がないこと」だと捉えていた私たちは、居住支援と就労支援を始めました。

最初にアパートに入居されたのは70代の男性で、高齢でもあり生活保護を受給することができました。私たちは「問題解決、支援終了」と、次の方の支援へと進んでいきました。

ところが数カ月後、「部屋から異臭がする」との連絡が入ります。慌てて訪ねると、ライフラインはすでに止まっており、部屋はゴミ屋敷状態。「亡くなっているかもしれない」と最悪の事態を想定しつつ部屋に入ります。ゴミの中で横たわるその人を発見。声をかけると彼は何事もなかったように起き上がりました。「生きてた」と安堵しつつも「なぜ、こんなことになったのか。自立支援はうまくいったはずだ」と自問していました。

そこには2つの要因があると私たちは考えました。1つは「個人的要因」です。彼には何らかの障害があったか、あるいは生活自立の経験がなかったということです。現在の抱樸ならば、アセスメントにおいてそれらの課題を見出せたと思います。しかし30年前、力量不足は否めません。

もう1つの要因は「社会的要因」です。つまり、入居後、誰も訪ねていなかったということです。彼は、社会との「つながり」をもてずにいたのです。つまり、自立が孤立に終わっていたのでした。

私たちは、とくに「社会的要因」の重要性に着目しました。「つながり」の必要性が明確に示されている事象だと考えたのです。「つながり」こそが、私たちに「意欲」や「行動の動機」を与えます。それが欠落し、ゴミ屋敷になった。

つまり、私たちはいつ掃除をするのか、あるいはなぜ掃除をするのかということ。 「衛生上の理由」といいたいです、実はそれだけではありません。私のような「怠け者」の場合はとくにそうです。私は、誰かが訪ねてくれるとわかったとき、まじめに掃除をします。さすがに「恥ずかしい」という気持ち、あるいは「訪ねてくれる友人に対する心遣い」が働くからです。いずれにしても「他者の存在」が私に行動の動機を与えるのです。「自分のため」のみならず、「誰かのため」に掃除をするということです。長年野宿生活を続けてこられたこの方にとっては、ゴミの中で寝るほうが「日常だった」といえます。しかし、この日常に変化をもたらすものは何か。それが「他者との出会い」であり「つながり」なのだと考えました。

「人は何のために働くのか」。一般的には「食べるため」「お金のため」といいます。これは自分自身の必要性、つまり「内発的な動機」による行為です。当事者の主体性を考えるとき、これは何よりも重要です。しかし、本人が「どうでもいい」と思った時点でそれは終わってしまいます。私は、「諦念」の中にたたく路上の人を大勢見てきました。そういう人がもう一度立ち上がるためには、居住や就労の支援に加え「私はあなたを応援している。一緒に頑張ろう」と呼びかける他者の存在が必要だったのです。「誰のために働くか」という問いとその答えをもつこと。「あの人が応援してくれるから」「愛する人のためだから」、これら「外発的な動機」をもつ人は踏ん張ることができます。

路上では「畳の上で死にたい」と言っていた方がアパートに入居されます。でも「これで安心」とはなりません。「俺の最期は誰が看取ってくれるだろうか」。それが残された課題でした。就職も決まり、生活も落ち着いた。その姿は隔世の感さえあります。しかし、部屋の中にポツンと独りたたずむ姿は、路上のあの日と何も変わらない。何が解決して、何が解決していないか。私たちは問われていました。

「問題解決型支援」の場合、「問題が解決した時点」で支援は終了します。しかし、解決していないもう1つの現実がある。「誰が……」の問いに答えがないということです。つまり「自立が孤立に終わる」ことが問題でした。自立しても最悪「孤立死」が待っている。それが「困窮孤立状態」にある人が抱える危機でした。私たちは、具体的な問題解決のために「この人には何が必要か」

を模索しつつ、同時に「この人には誰が必要か」を考え続けました。「何が」と「誰が」を同時に解決する仕組みが必要だったのです。

私たちは、「経済的困窮」を「ハウスレス」と呼び、「社会的孤立」を「ホームレス」と呼ぶようにしました。ハウスとホームは違うのです。これが抱樸の活動すべてに共通する認識であり、伴走型支援の基本的視点です。

この視点に気づかせてくれたのはホームレス当事者でした。その方は、日々中学生から襲撃を受けていました。彼は「何とかしてほしい」と訴えつつも次のように語られたのです。「真夜中にホームレスを襲いに来る中学生は、家があっても帰るところがないんじゃないか。親はいても誰からも心配されていないんじゃないか。俺はホームレスだからその気持ちはわかるけどな」と。中学生は家に住んでいるのだから「ハウスレス」ではありません。しかし「帰るところがない」「心配してくれる人がいない」のなら「ホームレスだ」と彼は言ったのです。

この襲撃事件から30年が過ぎました。残念ながら「社会が路上に追いついた」というのが私の実感です。格差や貧困が常態化し、同時に社会的孤立が広がりました。支援活動も拡充し野宿者数は減少していますが、「ホームレス（社会的孤立者）」は増えていると思います。そんな時代の変遷の中で生まれたのが伴走型支援でした。

### 3 伴走型支援とは何か——つながることの創造性

---

私たちは、そんな社会の必然の中で「つながること」に注目してきました。そして、そのことに重点を置く「伴走型支援」の必要性を訴えてきました。NPO法人ホームレス支援全国ネットワークでは、2010年度から「伴走型支援士養成講座」を開催し、これまでに1000人を超える人が認定を受けられました。2021年度からは、「一般社団法人日本伴走型支援協会」が活動をはじめ「伴走型支援」の普及を推進します。

以下に、伴走型支援とは何かについて、問題解決型支援との関係も含め、私の理解を紹介したいと思います。

◆ 編者紹介

奥田 知志 (おくだ ともし)

NPO 法人抱樸理事長、東八幡キリスト教会牧師。これまでに 3600 人 (2021 年 3 月現在) 以上のホームレスの人々の自立を支援。その他、生活困窮者自立支援全国ネットワーク共同代表、共生地域創造財団代表理事、全国居住支援法人協議会共同代表、国の審議会等の役職も歴任。主著：『逃げ遅れた』伴走者——分断された社会で人とつながる』本の種出版、2020 年、『いつか笑える日が来る——我、汝らを孤児とはせず』いのちのことは社、2019 年、『助けて』と言える国へ——人と社会をつなぐ』(共著) 集英社新書、2013 年、ほか。

原田 正樹 (はらだ まさき)

日本福祉大学社会福祉学部教授。専攻は地域福祉、福祉教育。日本地域福祉学会会長、日本福祉教育・ボランティア学習学会会長などを務める。厚生労働省の地域力強化検討会 (座長)、地域共生社会推進検討会などに参画。全国生活困窮者自立支援ネットワーク理事、全国社会福祉協議会・ボランティア市民活動振興センター運営委員などを歴任。主著：『地域福祉の学びをデザインする』(共編) 有斐閣、2016 年、『地域福祉の基盤づくり——推進主体の形成』中央法規出版、2014 年、『地域福祉援助をつかむ』(共著) 有斐閣、2012 年、ほか。

伴走型支援——新しい支援と社会のカタチ

*Walking Side by Side with People in Need of Support:*

*A New Approach to Foster Social Ties*

2021 年 8 月 30 日 初版第 1 刷発行

編者 奥田 知志  
原田 正樹



発行者 江草 貞治

発行所 株式会社 有斐閣  
〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-17

電話 (03)3264-1315[編集] (03)3265-6811[営業]  
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

組版 株式会社明昌堂

印刷 萩原印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

© 2021, Tomoshi Okuda, Masaki Harada.

Printed in Japan

ISBN 978-4-641-17466-5

★定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

**JCOPY** 本書の無断複製(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に(一社)出版者著作権管理機構(電話03-5244-5088, FAX03-5244-5089, e-mail:info@copy.or.jp)の許諾を得てください。